

# 探訪 北の風景 ⑤

## 襟裳岬 日高管内えりも町

青木和弘

日高山脈を恐竜の背骨に例えると襟裳岬は太平洋に沈む尻尾の尖端である。この自然は厳しい。風速が10メートルを超える日が年に229日もある。沖合は、寒流と暖流がぶつかり合い、海霧が発生し、霧日数は年に約108日に及ぶ。

文学者の木原直彦氏が、1965年に岬を訪れた開高健の紀行記「襟裳岬」の一節を紹介している。「これは一つの山脈がどのように息絶えるかという事実をむきだして教えてくれた地点である…略…日高山脈がここで海に犯され、沈むのである…略…海の中に佇むあちこちの奇岩怪石の群れは、水

に沈んでもまだ山脈が抵抗しつづけているのだ」。

襟裳岬というと、「風はひゆるひゆる…」で始まる島倉千代子の歌（1961年）や、森進一の「襟裳の春は 何もない春です」（1974年）で終わるヒット曲を思い浮かべる人もいるだろう。岬には二つの歌碑が並んで立ち、観光客があふれた。苫小牧港のフェリーを利用するライダーたちが必ず立ち寄る場所でもあった。岬を訪れる人々の思いはいろいろである。

しかし、年間30万人といわれた、えりも町の観光客入り込み数は、道の「北海道観光入込客数調査」によると、2016年度16万9800人で、その内、日帰り客が15万5100人（91%）、宿泊客は1万4700人（9%）という現状だ。

襟裳岬には、岬を一望する展望室や、強風体験施設などを備えた「風の館」がある。ゼニガタアザラシの観察もできる。遊歩道はきれいに整備され、歴史のある白い灯台もある。朝日、夕日に彩られる海や空、断崖絶壁が、様々な表情を見せてくれるのだが、景色を見るだけの観光では、客を呼べない時代になっている。

えりも町は、1970年（昭和45年）に町名を改称するまで「幌泉（ほろいずみ）町」だった。記録をたどると、徳川4代将軍家綱の時代である1669年（寛文9年）、松前藩士の蠣崎蔵人が



絶壁の上に造られた「風の館」。岬の風景が室内から一望でき、岩礁に棲息するゼニガタアザラシの観察もできる。中には、風速20メートルを体感できる施設や、各種展示物もある

商場を置き、その後、昆布漁で栄えてきた。同町の役場などがある幌泉（現・本町）の漁場は、1819年（文政2年）から一時期、高田屋嘉兵衛が取り仕切っている。箱館（現・函館）から幌泉、目梨（根室・千島）、国後・択捉などの海産物を箱館に集荷して、直接、江戸に運ぶ太平洋航路を開拓したのが高田屋嘉兵衛だった。日高コンブは当時から続く特産物である。

えりも町の人口は4744人（2018年3月末）。いまもコンブ漁とサケ漁が産業の中心である。江戸時代の1805年（文化2年）の記録によると、そのころの人口は約1800人。和人が50〜60人常駐し、アイヌの戸数が45戸とある。コンブだけで450〜600石、魚類や海苔など400〜







襟裳岬の太陽は太平洋から昇り、太平洋に沈む。岩場にはゼニガタアザラシが群れをつくり、のんびり昼寝をしていた。寒い日だったが、何のことはないのだろう。遠くを貨物船が通り、海面間近を群れをなした鳥が通過していった



襟裳岬は霧の日が多く海上輸送の難所である。1889年(明治22年)、当時、道内唯一の一等灯台として建設された襟裳岬灯台がある。現在は15秒ごとに閃白光を放ち、光は42キロメートル先まで届くという

500石、肥料にする魚粕の製造が盛んだった。えりも町内で多くの遺跡が発掘されている。縄文時代から、本州の弥生時代に相当する続縄文時代、擦文時代、アイヌ文化期と、脈々と続く歴史がある。もつとさかのぼると、最終氷期の7万年から1万年前に、大陸から渡ってきたマンモスの歯の化石が出土している。「マンモスを追いながら人間集団が大陸からはるばる襟裳岬までやってきたことはほとんど間違いがない」と、「えりも町史」は書いている。襟裳岬に向かう日高路は馬産地でもあるが、畜産が始まる切っ掛けは、クナシリメシナの乱の鎮圧に向かった松前藩が持ち込んだ馬の世話だったという。アイヌと和人の衝突など悲劇も多いのだが、歴史ロマンもある。